

(教育実践報告)

「なかまづくり」にかかわる取り組みについて

～ 奈良文化高等学校2005年度入学生の3年間～

西 村 健 (学校法人奈良学園 奈良文化高等学校教諭)

On Approaches to “Making Friends”

-Three years of the students who entered Narabunka High School in 2005-

Ken Nishimura

要旨 「人間関係の悩み」を訴える生徒が多くなってきている現状をふまえ、構成的グループエンカウンターにもとづいて「居心地のよい」集団(＝なかま)づくりを実践した高等学校の学級担任による実践報告。

キーワード： 高等学校 なかまづくり 構成的グループエンカウンター コミュニケーション

1. はじめに

全国的に中途退学や不登校になる生徒への支援体制が様々な立場から検討されている。中途退学や不登校に至る原因は明確な目標のないままの進学や不本意入学など様々であるが、人間関係も大きく影響を与えていると言われている。文部科学省の発表によると、高等学校に在籍している不登校生(59,419人)のうち人間関係を理由にあげている生徒は14.2%で、中途退学者(76,693人)のうちこちらも7.4%の生徒が人間関係を理由にあげている。⁽¹⁾ この人間関係を原因とする中途退学・不登校は何も全国の高校生だけの問題でない。高等教育の大学生や専門学校生も、人間関係による悩みを訴えることが多くなっているようである。具体的には“人間と接触するのが怖い”“人と話ができない”“クラスメートと何を話してよいかわからない”など、専門学校での中途退学者の約32%の学生が、学生と学生、学生と教師、学生と親などの人間関係を退学の理由としていた。これは他の理由(学費納入が困難24%・授業についていけない17%・自分の考えていた学校とは違っていた15%・その他12%)と比較しても多い数字である。⁽²⁾

筆者自身も学級担任として常に中途退学や不登校にならないように学級全体や個々の生徒に対して支援を試みるが、やはり中途退学や不登校になってしまう生徒は存在した。常に事象が発生すれば、該当する生徒たちに対して事象の悪化を避けるために、頻繁に家庭訪問や学級の他の生徒に働きかけてもらうなど様々な支援を行うが、残念ながら結果が好転しない場合があった。筆者の経験から中途退学や不登校になってしまう生徒の特徴を簡単に概観してみると、前述した学級内の人間関係を円滑に築いていない場合以外には、自分自身に対する自信がない、どこか潔癖症、学校・学級活動の参加に対して意欲

があまり感じられないなどの共通した傾向が見られた。

そこで筆者は学級担任として中途退学や不登校になる生徒が現れにくい集団づくりについて、「人間関係による悩み」に焦点をあてた教育的な実践を試みる必要性を痛感した。このような人間関係に関する問題を改善するときに活用する手法として、先行研究によるとグループ・ダイナミクス理論があると言われている。この理論に基づいて、小集団内の人間関係を向上するための体験学習（構成的グループエンカウンター）が生まれた。実際にこの理論に基づいた体験学習を導入することによって、人間関係やソーシャル・スキルが改善され、クラス内での人間関係がスムーズになり、出席率が向上したという先行研究がある。⁽³⁾ その先行研究を踏まえて、3年間筆者は「なかまづくり」のための参加体験型学習（関係づくり、自己開示、主張行動、ソーシャル・スキル、役割行動、他者理解、自己理解にかかわるグループ学習）を積極的に取り入れたホームルーム活動（学校行事・学年行事を含めて）により、魅力のある充実した高校生活を過ごせるよう働きかけを行った。このレポートはその取り組みの実践報告である。

2. 本校の概要

筆者が在職する奈良文化高等学校は1965年に奈良県大和高田市に奈良文化女子短期大学付属高等学校として開校した女子校である。2007年4月、設置母体である学校法人奈良学園の学園改編の一環として短期大学より独立し現校名に変更した。普通科（特進コース・普通コース・福祉コース）と衛生看護科・衛生看護専攻科の3学科で構成されている中規模校である。介護福祉士やホームヘルパーの養成をめざす普通科福祉コース、准看護師養成機関である衛生看護科、看護師養成機関である衛生看護専攻科と特色のある学科・コースを有している高校である。「清く、優しく、逞しく」の校訓のもと、感謝の気持ちを大切に、ボランティア活動などに積極的で、思いやりがあり、優しさ、温かさのある生徒が多数在籍していることが特徴である。またクラブ活動が非常に活発で、バスケットボール部・ソフトボール部・新体操部はインターハイの常連であり、吹奏楽部・社会福祉部・書道部の活動も顕著である。

今回の実践を行うにあたっては、人権教育のホームルームの時間を活用した。そこで本校の人権教育の概要も示しておく。

・人権教育の基本方針

これまでの同和教育の経緯・成果、また、それが果たしてきた役割を踏まえ、21世紀の真の人権教育を展望し、あらゆる教育活動を通して人権教育を推進する。

・人権教育の重要課題

- ①本校の教育目標を掘り下げるとともに、教職員の共通認識を深めること。人権教育を通して、私たちが「求める人間像」を明らかにすること。
- ②すべての生徒にわかる授業を構築し、すべての教育活動に意欲的に取り組む態度を育成すること。
- ③人権を尊重する心情形成と、なかまと共に支え合い励まし合える学級集団づくりに積極的に取り組むこと。
- ④教職員各個人の人権感覚を自ら問い返す営みを継続すること。

・L. H. R. 人権学習指導目標

- 学校：①一人ひとりの可能性を伸ばすこと。
②一人ひとりのちがいを豊かさとしてとらえること。
③一人ひとりのつながりを大切にすること。
④一人ひとりの自己表現の能力を高めること。
- 1年：新しい出会いの中で自分を大切にし、同時に他人を認め大切にすることを養う。
2年：さまざまな人権学習を通して差別の実態を明らかにし、自分の役割や責任を果そうとする態度を身につける。
3年：それぞれの進路を目指す中で、グローバルな視野にたつて人権侵害や人権問題の克服にむけて、主体的にかかわろうとする力を身につける。

・L. H. R. 人権学習年間指導計画

	1年	2年	3年
1学期	自尊感情	異文化理解・多文化共生	近畿統一用紙
2学期	コミュニケーション	ケガレ意識・女性差別	反戦・平和学習
3学期	障害者問題	部落問題	卒業後の生き方

これらの「人権教育の基本方針」「人権教育の重要課題」「L. H. R. 人権学習指導目標」「L. H. R. 人権学習年間指導計画」にもとづいて、3年間の人権教育が展開されている。今回の実践は「人権教育の重要課題」の③の項目、「L. H. R. 人権学習指導目標」の学校目標②と③の項目にかかわる取り組みである。

3. 「なかまづくり」にかかわる取り組み

(1) 「なかまづくり」にかかわる取り組みについて

なぜ、筆者は学級などの集団に「なかまづくり」という働きかけをする必要性を感じたのか。それは集団というものは編成が行われれば、すぐに集団になるわけではないからである。編成してできたばかりの集団は単なる「人々の集まり」にすぎない。「人々の集まり」に何の働きかけも試みなければ、それはいつまでたっても「集団」にならないからである。

今回、「なかまづくり」の取り組みを行うにあたって、「なかま」とはどのようなものかを確認したい。「なかま」に似た言葉として「集団」という言葉がある。では、「集団」とはどのような人々の集まりなのだろうか。「集団」の社会学的な定義は以下の通りである。

- ①人々の間に共通の目的があること。
- ②人々の間に共通の行動規範・行動様式があること。

上記2つの要素を備えた人々の集まりを「集団」と呼ぶ。しかし、この2つの要素しか有していない集まりでは「人間関係の悩み」が生じる可能性がある。なぜなら、この集まりではお互いを認め、理解するという要素が含まれていないからである。つまり、人々にとって「人間関係の悩み」の生じにくい居心地のよい集まりとはならないのである。では、この「人間関係の悩み」が生じにくい集団（「人間関係の悩み」を解消できる集団）にはどのような要素が必要なのであろうか。それは次の要素ではないかと思う。

- ③親和的な人間関係があること。

筆者は、この③の要素が備わった集団こそが「人間関係の悩み」を生じにくくさせているのではないかと考えている。つまり、本実践で言うところの「なかま」とは、上記①～③の三つの要素を備えた人々の集まりであるということを確認したい。

今回、取り組みを行うにあたって、卒業時に生徒たちの「なかま」の範囲が学校全体に広がることを念頭においた。そのため指導計画の作成にあたっては、3年間に及ぶ指導計画の立案となった。簡単に言えば、3年間で「クラス単位→学年単位→学校全体」へと発展するように意識して計画立案したのである。また各学年においては、3年間の広がりを意識しつつ、基本的には1学期は「クラスのなかまづくり」、2学期は「クラスのなかまづくりの再確認」と「学年全体のなかまづくりの準備」、3学期は「学年全体のなかまづくり」と「異なる学年とのなかまづくり」というイメージをもって指導を行った。特に第3学年では「なかまづくり」の総仕上げの学年と位置づけた。なぜなら、体育大会・文化祭などの生徒会行事や部活動が最上級生（「奈良文化高校のなかま」の中心的な存在）へと成長させる機会になると考えたからである。

(2) 第1学年 (2005年度)

[1学期]

■新入生オリエンテーション (新入生人権学習会)

内容：・「奈良文化高校の新しいなかまたちに」(本校人権教育部からのメッセージ)を使いながら、高校生活の意味やなかまづくりについてクラスで話し合う。
・卒業生から新入生に対するメッセージを実際に聴く。

ねらい：高校生活やなかまづくりの大切さを学ぶ。

[2学期]

■L. H. R. 「流れ星」

内容：「流れ星が一つ落ちてきました。…その星の下に一軒の家があります。…」という担任の言葉のとおり、一人ひとりが白紙に絵を書いていく。一方通行のコミュニケーションによる言葉を受け取って絵を描いていく実習。その結果、人それぞれにさまざまな絵ができあがる。そこで、一方通行のコミュニケーションが引き起こす問題についてクラスで話し合い、お互いの考えを深める。

- ねらい：①一方通行のコミュニケーションを行った場合、どのようなこと(ちがい)が起こるかをそれぞれが描いた絵から体験する。
②それぞれの人によって認知の仕方(言葉の受け取り方、表現の仕方など)にちがいがあること気づく。
③コミュニケーションには応答しあうことが必要である。すなわち双方通行のコミュニケーションが必要であることに気づく。

■L. H. R. 「バスは待ってくれない」…普通科・衛生看護科2クラスの合同L. H. R.

内容：歯痛で苦しむ花子さんに歯医者までの地図を渡すため、班ごとにばらばらの情報を集めて協力して地図を作成する実習。生徒一人ひとりに渡される情報は口頭のみで伝えられるため、全員の協力が必要となる。地図の完成後、正解の発表。その後ふりかえり用紙を各自で記入。それをもとに班やクラスで話し合い、お互いの考えを深める。

- ねらい：①チームワークを楽しむ。
②チームで作業するとき起こるさまざまな事柄(メンバーの様子、コミュニケーションの仕方、リーダーシップのあり方やチームの雰囲気など)に気づく。
③実習を通して、情報の処理の仕方や仕事の手順化について考えたり、自分が持っている固定観念や思い込みなどに気づく。

【合同L. H. R. のねらい】

学科内では体育の授業や学科独自の行事などを通しての交流は活発である。しかし学科間

では教育課程が大きく異なるため、同一学年といえども普通科と衛生看護科のクラスが交流するという機会は少ない。そこで、3学期に学年全体の「なかまづくり」を行う前段階として、普通科・衛生看護科のクラスを合同にし、L. H. R. を実施する。この組み合わせは初顔合わせとなるが、ともに活発なクラスなので合同で実施することにより、学科を越えての仲間づくりに良い影響が与えられると考えられる。

■学年集会「ふれあい集会」（3学期実施）の企画立案

内容：「クラスの枠を越えたなかまづくり」につながるような集会の企画・準備を行う。

ねらい：各クラス室長・副室長が実行委員となって集会の企画を行う。室長・副室長が協力して一つの企画を準備することで、同一学年としての連帯感を養う。

〔3学期〕

■学年集会「ふれあい集会」

内容：開会式・ドッジボール大会（リーグ戦）・閉会式

ねらい：①レクリエーション（ドッジボール）を通して、同一学年の仲間としての自覚と連帯感を養う。

*ドッジボール・チームはクラス単位ではなく、クラスがまたがる形で編成。（抽選でチーム分け）

②大会運営は生徒実行委員、怪我などで競技に参加できない生徒を中心に実施。（リーダーシップの養成）

1学期は生徒たちにとって、高校生活がスタートし期待と不安感で一杯の時期である。しかし、この「新入生オリエンテーション」は同じ目標をもつ人々が集まる奈良文化高校のなかまであるということを感じる機会となり、お互いが連帯感を持つきっかけとなる行事となった。また卒業生からのメッセージでは、不安や挫折感を乗り越えてなかまと共に大きく成長した卒業生の心のこもった言葉をじかに聴くことにより、生徒たちは元気づけられたようである。少し精神的に挫けそうになって、学校を休みがちになりそうな生徒が、必ず卒業すると決意するきっかけとなった行事でもあった。

2学期の実習「流れ星」「バスは待ってくれない」では、良好なコミュニケーションをとるために必要な技術について学習した。この実習で技術を完全に体得できたというわけではないが、「聴くこと」や「チームワーク」の大切さについて再確認できたようである。合同でL. H. R. を実施したことにより、校内に新しい人間関係が芽生えたようにも感じた。さらに何らかのトラブルでクラスに入りにくくなった生徒に対して、他のクラスの生徒が一時避難的な受け皿の役割を果たすという効果がみられた。

3学期に実施した学年集会（ふれあい集会）は、2学期から実行委員会を組織して準備した学年行事である。開会式・競技・閉会式の運営を生徒実行委員が主体的に活動できるように配慮をおこなった。その結果、集会終了後の実行委員生徒の表情は非常に充実したものとなり、自尊感情の高まりに良い影響を与えたのではないかと考えられる。またチームの構成メンバーが初顔合わせとなる生徒も多く、チ

ームの活動が停滞するのではないかとの不安もあった。その不安を解消するために、集会実施前にチームの顔合わせなどを実施しお互いの交流を深めた。顔合わせのときは少し不安そうな表情をする生徒もいたが、実際に競技が始まると、全員が楽しそうにプレーをし、競技が進むにつれ、チームの結束力も強まった。またこの集会では怪我などで参加しにくい生徒をどう参加させるかが課題であったが、実行委員会のメンバーに加え事前準備や当日の大会運営を任すことで活動の場を提供し、課題を解決することができた。次の学年で生徒たちの「なかまづくり」がさらに大きく広がると期待できる集会になったと思う。

第1学年の取り組みを総括すると、全体的に円滑に進んだように感じられる。学科・コース・クラスの垣根は取り払われ、学年の雰囲気として奈良文化高校のなかまという結束力が生まれたのではないかとも思う。以降、この学年の生徒たちは学校行事などでクラスの枠を越えた活動をよく見かけるようになった。

(3) 第2学年(2006年度)

[1学期]

■L. H. R. 「バック・フィードバック Part 1」

内容：自分の背中に模造紙をつけて部屋の中を歩き回る。そして、出会ったメンバーがその模造紙にメッセージを書く。最後に背中の模造紙をはずし、その内容を確認する。

ねらい：①グループの中での自分の行動が、他のメンバーにどのように映っているかを知る。

②お互いが自分の気持ちを素直に表現しあうことによって、より深いかわりあい体験をする。

■L. H. R. 「ちがいのちがい」

内容：「Aさんは仏教徒であるが、Bさんはキリスト教徒である。」「男性は土俵にのぼれるが、女性は土俵にのぼれない。」などの「ちがい」を書いたカードを提示し、生徒たちに「あってもよいちがい」「あってはいけないちがい」「どちらとも言えない」の3つに分類させる。分類したうえで、「あってもよいちがい」「どちらとも言えない」が差別や排除の理由になっていないかを考えさせる。また、友人関係においても「ちがい」を理由にして排除してはいけないことに気づかせる。

ねらい：①人権問題を知識として理解している生徒が多い中、身近な問題について考え、気づくことによって自分のものとする。また、文化や個性の多様性を認め、人権尊重と反差別の視点を持つ。

②互いの「ちがい」を認めあうことにより、多様な生き方・価値観を尊重する態度を養う。

■L. H. R. 「よいところをさがそう」…授業参観で実施。授業参観に出席された保護者も生徒と一緒に人権教育L. H. R.に参加していただいた。

内容：2人一組になって、相手（友人・保護者）のよいところをジェスチャーで表現しあう。

ねらい：①相手のジェスチャーを理解しようとする行為により、他人との感情を共有することを体験し、相互の自己肯定感を高めることをめざす。

②自己理解、他者との感情を共有することによってなかまづくり・コミュニケーション能力の育成に努める。

③保護者も実際にジェスチャーに参加することで、親子関係の見直しにもつなげる。

■L. H. R. 「四角のピザ」

内容：「正方形のピザの四分の一を誰かが先に食べてしまった。残ったピザを全く同じ形に切って、4人で分けて食べたいと思いますが、さて、どのように切ったらいいでしょう」この問題をグループで考えて、正解を導き出してもらおう実習。

ねらい：①グループとして問題を解いていくことによって、グループ作りを促進させる。

②ものの見方・考え方には色々あるということに気づく。

[2学期]

■L. H. R. 「気づきのワーク」

内容：自分自身の基本的構え（対人関係）・エゴグラムを確認し、よりよい人間関係を築くために、自分自身が高めていければよい要素を確認する。

ねらい：①自分の「基本的構え」と「エゴグラム」を知り、よりよい人間関係を営むために、自分のどこをどう変えていくのがよいかを具体的に考える。

②心のありようと基本的構えが人間関係とどのように結びついているかを考えることで、問題点を明らかにする。

■L. H. R. 「自己PRの情報集め Part 1」

内容：友人から人物評価してもらおうことで、自分自身に関する情報をもらい、自分のことを理解する。

ねらい：①客観的な自己理解を進めるために、友人から見た自分の姿に関する情報を集める。

②自己PRを容易にし、自尊感情と自己肯定感を高める。

[3学期]

■学年集会「ふれあい集会」（スキー研修中に実施）

内容：生徒が企画立案、そして進行するレクリエーション大会。ヒューマン・チェーン・ゲーム、奈良文化高校クイズなど。

ねらい：①レクリエーションを通して、同一学年の仲間としての自覚と連帯感を養う。

②集会運営は福祉コースの生徒を中心に実施し、リーダーシップの養成をめざす。

■ L. H. R. 「名画鑑賞」…第1学年との合同L. H. R.

※今回のL. H. R. は異なる学年の合同形式であるが、クラブ活動での交流が非常に活発なので全員が顔見知りの状態である。知り合って約10か月が経過し、お互いにもう少し深く知り合うことを目的として実施した。

内容：ファシリテーターの指示に従って、模造紙に参加者それぞれが思い思いの色で線や円、三角などを描く。そうして偶然の如くできあがった“名画”にグループで題名をつけて、皆で「名画鑑賞」を行う。

ねらい：①グループづくりをすすめる。

②グループで共同作業をする中で起るさまざまなことに気づく。

③実習の構造は単純だが、深く話し合うといった要素も含まれているので、参加者同士が深く知り合うきっかけをつくる。

④発想の転換や創造性の刺激などにも役立つ。

■ L. H. R. 「合格体験記」…第3学年との合同L. H. R.

※今回のL. H. R. も異なる学年の合同形式であるが、クラブ活動での交流が非常に活発なので、第1学年との合同L. H. R. と同様、全員が顔見知りの状態である。

内容：第3学年の生徒が後輩（第2学年）たちに受験体験や自分の思いを伝える。

ねらい：①第3学年の生徒が卒業すれば最上級生となり、学校の中心的な存在（リーダー）となることを確認する。

②先輩の思いを聴くことによって、先輩と後輩の結束力の強化を図る。

■ 春期課題「自己PRの情報集め Part 2」

内容：2学期に実施した「自己PRの情報集め」と内容は同じ。しかし前回は2・3名の友人に対してコメントを行ったが、今回はクラスの友人全員に対してコメントを行う。

ねらい：生徒のコメントは1年間のつきあいのまとめ的な内容となり、そこから得られるコメントは自尊感情と自己肯定感をさらに高めることにつながる。

1学期はクラスのメンバーの考えていることを、言葉やジェスチャーを使って深く読み取ることを中心に「なかまづくり」を展開しようと試みた。背中にかかれた友人からのメッセージやジェスチャーで伝えられた気持ちを感じ取れたときの生徒の笑顔（非常に照れくさそうにしていた）はとても嬉しそうであった。「なかま」に受け入れられている、自分を認めてもらっていると実感した瞬間だったようである。また、「文化・個性の多様性」「ものの見方・考え方の多様性」についての確認も行った。その結果、相手の考えを考慮に入れず、自己中心的な発言をしてしまいがちであった生徒にとって、直接的ではないにせよ少し考えるときっかけとなったようである。

2学期は自分自身を理解し、自尊感情を高めることを目標としてホームルームを展開した。実習「気づきのワーク」では人間関係を豊かなものにするために、自分自身の性格の中で高めていければよい要

素の確認ができ、自分をよくするためのポイントをしっかりと考えることができた。また実習「自己PRの情報集め」では自分の欠点は容易に見つけることができ、自己嫌悪に陥りやすいという状況を打開するために実施した。友人から長所を言ってもらうことにより、自分の良いところを再認識し、自分に対する自信と誇りを持ちなおすきっかけとなったようである。1学期にも同様な取り組みをしたが、時間が経過すれば、また自分の欠点ばかりに心が囚われてしまうのが現状で、定期的にこのような実習を展開しなければならないと実感した。

3学期は他の学期と比べ授業日数は少ないが取り組み内容は盛りだくさんであった。「ふれあい集会」は昨年と異なり、会場は学校内ではなく、スキー研修先である長野県の宿泊施設で、研修の一コマとして実施した。企画立案・進行は福祉コースの生徒が実施した。福祉コースは学年の中では比較的大人しい生徒が多く在籍しているクラスである。しかし、福祉コースの生徒たちは福祉科の授業の中でレクリエーションについて学んでおり、この「ふれあい集会」のなかで学習成果を発表しようということになった。福祉コースの生徒たちは事前の準備を綿密に行い、集会当日、無事に大役を果たすことができた。大役を果たすことのできた福祉コースの生徒たち、そしてレクリエーションで学年の親睦を十分図れた生徒たち共に楽しいひと時を過ごしたようである。また学校の中心的な存在になる準備として、他学年との交流を前提としたホームルーム展開も計画立案した。まず第1学年との合同ホームルームを実施した。第1学年の生徒にとってはクラブ内での苦手な先輩、第2学年の生徒にとっては何を考えているか理解できない後輩という誤解を互いに持っていたため、クラブ内での人間関係にギクシャクとしたものがあるという情報が両学年の担任に入っていたので、荒療治を覚悟の上で実施した。二つの学年で構成するグループを編成しグループワークをすることから、チームワークの大切さやお互いの良いところを再認識させようと実践を試みた。両学年とも「先輩とはどうあるべきか」「後輩とはどうあるべきか」などについてそれぞれの立場から考えるきっかけとなったようである。第3学年との合同ホームルームでは、第3学年の生徒たちが受験体験を中心に高校生活全般について語った。先輩の方からは後輩たちにも頑張してほしい、後輩たちの方からは先輩たちのようになりたいという思いが伝わった集会であった。第1学年と第2学年の間には少し課題も残ったが、第2学年と第3学年の間にはさらなる結束力が生まれた瞬間であった。

第2学年の取り組みを総括すると、学校全体へ「なかもづくり」を進めるにあたって、円滑に進んでいった部分、少し課題の残った部分があったと考えられる。特に他学年との交流に関しては細心の注意が必要であった。しかし結果としてはそれぞれの生徒たちの成長にとって収穫となるものも多くあったのも事実である。第1学年と第2学年の生徒たちはそれぞれが良好な先輩・後輩関係について考え、少し成熟した人間関係を認めることができる言動も見られるようになった。

(4) 第3学年 (2007年度)

[1学期]

2年間「なかもづくり」にかかわる実践を試みたが、各実習ではそれぞれコミュニケーションをとるために必要な技術を断片的に学んだにすぎない。そこで普段の授業や生徒会行事など、学校生活のすべ

てを「なかまづくり」のための総合実習の期間と位置づけた。生徒がこれまでの実習の中で気づいたことや学んだことを上手く学校生活の中で活かしていけるように配慮し、実際の学校生活の中で指導を行った。そのため「なかまづくり」のためのL. H. R. を筆者としては意識的に設けることはしなかった。

〔2学期〕

■L. H. R. 「反戦平和、生命を尊重する心を深める」

内容：絵本『戦争で死んだ兵士のこと』の朗読を聴き、戦争と生命について考える。

- ねらい：①絵本の主人公（戦争で死んだ兵士）が自分と同じような人生を歩んでいること、大切な命を持っていることを読み取る。
- ②生命を大切にすることから、反戦の心や平和を尊ぶ心を育てる。
- ③自分の存在を大切にすることを考え、さらにクラスの友人も自分と同じ大切な存在であることに気づき、他人を思いやり、生命を尊重する態度を育てる。

〔3学期〕

■学年集会「ふれあい集会」

内容：生活体験作文「3年間をふりかえって」発表会

- ねらい：3年間の高校生活のまとめとなるような行事とする。各クラス代表による生活体験作文「3年間をふりかえって」を聴き、3年間同じ高校で生活したなかまであることを確認し、卒業してもその親交を続けていこうと皆が誓えるような集会とする。

■L. H. R. 「合格体験記」…第2学年との合同L. H. R.

内容：第3学年の生徒が後輩（第2学年）たちに受験体験や自分の思いを伝える。

- ねらい：①卒業を控え後輩たちに先輩としての思いを伝える。
- ②学校・クラブでの中心的な存在（けん引役）であったという自覚を持ち、自尊感情を高める。

■L. H. R. 「バック・フィードバック Part 2」

内容：自分の背中に模造紙をつけて部屋の中を歩き回る。そして、出会ったメンバーがその模造紙にメッセージを書く。最後に背中の模造紙をはずし、その内容を確認する。

- ねらい：①グループの中での自分の行動が、他のメンバーにどのように映っていたかを最後に確認する。
- ②お互いが自分の気持ちを素直に表現しあうことによって、より深いかかわりあいを体験する。

1学期は「体育大会」などの学校行事を中心にして実践を展開した。本校の体育大会は学年を越え、

クラス毎に縦割りのグループを作り、競技を実施する。第3学年の生徒たちはそれぞれのグループのリーダーとして後輩たちに入場行進や応援合戦などの指導を行った。それぞれの生徒たちは最上級生であるという自覚を持ち様々な場面で活躍をしていた。「なかまづくり」の最終年度としての滑り出しは良好であった。

第2学期は絵本の朗読を聴くことから「生命」の尊厳について考えさせた。「生命」の尊厳をあえて第3学年で取り上げた理由としては、戦争や紛争、凶悪犯罪が多発し、毎日のように死者に関する情報がテレビやインターネットであふれている。そのため「死」に対する感覚が麻痺してしまい、傍観者となってしまっていないだろうかという思いから実施した。そしてテレビで報道されている「亡くなってしまった人の命」と自分の命が同じであり、かけがえのないものであるということや、さらに友人にも同じようにかけがえのない命を有しているなかまであるということを理解してもらいたいという思いから実施した。生徒たちは決して傍観者的になってテレビなどの報道を見ていたわけではなかったが、改めて「生命」について考えるきっかけとなった。

第3学期は3年間の総まとめとなる期間である。「ふれあい集会」は卒業を間近に控えた生徒たちが友人の3年間の高校生活をまとめた体験作文を聴き、自分の3年間でふりかえるのと同時に、同じ学校で生活した「なかま」であることを再認識する場として実施した。生徒全員が冬休みの課題として「3年間でふりかえて」という生活体験作文を書き、代表生徒の発表を聴いたときには共感する部分も多かったようで、卒業に向けて生徒たちの気持ちを一つにまとめるきっかけとなった。「進路集会」では第3学年の生徒として第2学年の後輩へ思いを伝えることにより、先輩としての自分自身の3年間を総括させた。「ふれあい集会」と「進路集会」はそれぞれ集会によって構成するメンバーや発表会の趣旨は異なるが、生徒たちは3年間の学校生活をやり遂げた達成感を持ち、自尊感情が高まるきっかけとなった。「バック・フィードバック Part 2」は、3年間の感謝の気持ちを友人の背中に貼った模造紙に書いた。生徒たちは友人にメッセージを書いている最中、背中に伝わる友人の熱い思いに心をめぐらせていたようである。「バック・フィードバック Part 2」を終えた生徒たちは、メッセージを書いている時に無理な姿勢をしていたこともあり、体力的に疲れた顔をしていたが、友人の書いたメッセージを読みながら非常に深い感慨を覚え、充実した表情をしていた。「疲れたけど、とてもうれしい疲れだった」と実習終了後、笑顔で生徒は感想を述べた。

4. まとめ

今回の教育実践は中途退学・不登校を防ぐための一つの方策として、「人間関係の悩み」の解消を主眼においた。人間関係の悩みを解消するということは、つまり生徒にとって学級・学年・学校が居心地のよいものでなければならないということである。校内での生徒たちの生き生きとした姿を見ていると、今回の実践には一定の成果があり、さらに各実習や活動のねらいも参加体験型学習を積極的に導入したことにより、抵抗感なく生徒に受け入れられ、コミュニケーションをとるために必要な技術の確認をすることができた。実習後に記入する「ふりかえりシート」(実習のまとめ)や生徒へのヒアリング、校

内での楽しそうな生徒の姿を見ていると、生徒によりちがいはあると思うが次のようなことが再確認できたようである。

- 実習や活動の中で「協力すること」の大切さに気づいた。
- 実習や活動の中で「相手に自分の思いを伝えたり、相手の思いを聴くこと」の大切さに気づいた。
- 実習や活動の中で「他者に対する思いやりの心」の大切さに気づいた。
- 実習や活動の中で「多様な考え方があること」を知った。そして、「ちがいを認め合うこと」や「他者（ちがい）を受け入れること」の大切さに気づいた。

そして生徒たちには様々な実習や活動を達成していく過程で次のような効果があらわれたと感じている。

- 実習や活動を完成（成功）させたことで「達成感」が生じ「自己肯定感」を高めていった。
- 実習や活動を協力して完成（成功）させる中で集団としての「連帯感」を強めるようになった。

さらに他の学科や学年との交流を密にすることによって、学科や学年ごとに異なる雰囲気（学科や学年ごとのちがい）を理解することができた。このことが生徒たちにとってよい刺激となり、クラス間・学年間の人間関係はより広範囲なものになったと考えられる。生徒同士がお互いに切磋琢磨し、様々な分野で共に向上しようという姿勢を強く持ったようにも感じている。

参加体験型学習に対する生徒の感触はおおむね良好であった。再びこのような機会があれば挑戦したいという前向きな意見が生徒から寄せられた。また実際の病院での看護臨床実習を行う衛生看護科の生徒たちからは、看護の現場では相手（患者）を選ぶことはできないので、色々な人とのコミュニケーションの取り方を学ぶいい機会であったという意見が聞こえてきた。しかし問題点もあった。「なかまづくり」のために実施した参加体験型学習は教師の働きかけ如何によっては、ただ楽しさだけを追求するゲームになってしまうことである。人権教育のL・H・R計画のなかでの位置づけがぼやけてしまう恐れがあるということである。そのようにならないためにも「ふりかえりシート」を活用した。その結果、課題に対する自らの気づきも深まり、課題を自分のこととして捉え、考えることにつながり、一定の成果があった。

最後に、校内での生徒たちの姿を見ていると、色々なところで「あいさつ」が飛び交い、教師が予想もつかないような組み合わせで生徒同士が会話している場面を見かける機会が以前よりも多くなった。また卒業前に実施した校内アンケートでも、本学に入学して良かった、友人との人間関係も良好であると読みとれる回答をした生徒の割合が他学年の生徒の割合よりも高かった。^(注) これらの数値が全て今回の「なかまづくり」にかかわる取り組みの成果であるというわけではないが、一定の役割を果たしたのではないかと考えられる。筆者としては今回の教育実践を通して2005年度入学生から学んだことを活かし、「なかまづくり」にかかわる取り組みを充実させ、今後も生徒たちの高校生活が豊かで実りのあるものになるようにしていきたいと考えている。

(注) 校内アンケート調査結果

※調査日：第1学年 2008年1月30日

第2学年 2008年2月20日

第3学年 2008年1月16日

Q. 奈良文化高校に入学してよかったですか？

→「ハイ」と回答…第1学年 65.3%・第2学年 57.6%・第3学年 75.0%

Q. あなたは同年代の友人から認められていると思いますか？

→「ハイ」と回答…第1学年 27.4%・第2学年 28.0%・第3学年 69.4%

【謝辞】

今回の実践にあたり2005年度入学生たちの学年主任であった阪本宗三教諭，そして2005年度から2007年度にかけてこの学年団に所属していた諸先生方にはたくさんのご指導・ご助言をいただきました。感謝申し上げます。

【引用文献】

- (1)文部科学省『平成17年度における児童生徒の問題行動等の状況（概要）』（2006）
- (2)大阪府教育委員会『専門学校統計資料』（2001）
- (3)荒木正明「高等教育における人間関係的訓練の導入と有効性の考察」
（日本大学大学院総合社会情報研究科紀要，2003）

【参考図書】

- ・河村茂雄『学級経営に生かすカウンセリングワークブック』（金子書房，2006）
- ・田上不二夫『実践スクール・カウンセリング—学級担任ができる不登校児童・生徒へ援助』（金子書房，1999）
- ・星野欣生・津村俊充『人間関係トレーニング・マニュアル集101「流れ星」』（プレスタイム，2001）
- ・星野欣生・津村俊充『人間関係トレーニング・マニュアル集203「バスは待ってくれない」』（プレスタイム，2001）
- ・星野欣生・津村俊充『人間関係トレーニング・マニュアル集605「バック・フィードバック」』（プレスタイム，2001）
- ・星野欣生・津村俊充『人間関係トレーニング・マニュアル集901「アイス・ブレイキング1」』（プレスタイム，2001）
- ・星野欣生・津村俊充『人間関係トレーニング・マニュアル集201「名画鑑賞」』（プレスタイム，2001）
- ・奈良県高等学校人権教育研究会・編『なかま 高等学校』（奈良県人権・部落解放研究所，2002）
- ・國分康孝・編『エンカウンターで学級が変わる 高等学校編』（図書文化，2003）
- ・小泉吉宏『戦争で死んだ兵士のこと』（メディアファクトリー，2001）